

病棟スタッフの声かけが 患者の作業療法の参加に及ぼす影響

—精神科療養病棟での実践—

中島 美和^{*1} 末永 太作^{*1} 安田 健二^{*1}
重田 かおる^{*1} 森岡 美由子^{*1} 西田 征治^{*2}

*1 特定医療法人大慈会 三原病院

*2 県立広島大学保健福祉学部作業療法学科

抄 録

当院の精神科療養病棟において、病棟スタッフが患者に対して声かけを行い、作業療法棟での集団活動への参加を促す取り組みを行った。声かけは日々の病棟業務の1つとして患者に声をかけて回る誘導係と参加が困難な患者の担当看護師や介護職員によって行われた。結果的に作業療法棟での集団活動に参加する患者が有意に増加した。事例を通してその背景には、心配してくれる身近な存在の者への期待に応えようとする患者の思い、病棟スタッフの愛のある厳しい言葉、作業療法士の患者の能力を見極め安心して活動に取り組むための援助、作業療法士と病棟スタッフとの連携が存在していると考えられた。

キーワード：集団活動，参加，病棟スタッフ，声かけ，療養病棟

1 緒言

精神科病院の療養病棟入院中の患者は限られた生活空間の中で過ごすことが多く、活動量が乏しい。長期入院に伴い生活意欲が低下し無為に過ごす患者も少なくない¹⁾。同様に、当院療養病棟にも生活意欲が低下し、不活発な状態あるいは無為な状態にある患者は多い。当院の作業療法（以下、OT）にはOT棟で実施する集団活動（以下、OT棟集団活動）と、作業療法士が病棟へ訪問して実施する集団活動（以下、病棟集団活動）がある。OT棟集団活動には、料理や園芸などメンバーが固定されている活動と手工芸やぬり絵といったメンバーが固定されておらず自由に参加できる活動がある。普段生活をしている場で実施する病棟集団活動は、病棟から出ることが無く、臥床しがちな生活をしている活動性の低い患者も参加することが容易である。しかし、OT棟集団活動は病棟を離れ一定の時間をOT棟で過ごし、ぬり絵をしたり音楽を聴いたり何らかの作業をするため活動性や意欲が必要である。病棟集団活動には参加するもののOT棟集団活動には参加しない患者やどの活動にも全く参加しない患者がいる。これまで、そのような患者に対して作業療法士は面接し興味のあるような活動を提示したり、OT棟集団活動の開始時刻になると患者一人一人に声をかけて回るなど試行錯誤してOT棟集団活動への参加を促してきたが十分な成果は得られなかった。そのため、OT棟集団活動への参加を促す目的で、患者の特性を知る病棟スタッフを中心となって声かけすることを試みた。その結果、病棟から離れることのなかった患者が定期的に参加するようになるなどOT棟集団活動への参加者が増加した。本稿では、今回行った声かけの効果について事例を加えて報告する。

2 対象および方法

2.1 対象者

本研究は第一著者が所属する精神科病院の療養病棟（以下、A療養病棟）で行った。病床数は60床であり、2013年6月1日時点の疾患別の割合は、統合失調症71.2%、アルコール依存症13.1%、躁鬱病3.9%、その他11.8%であった。男女比は1:1で、平均年齢は64.5±8.1歳であった。病棟は開放病棟であり日中患者は自由に出入りすることが出来た。研究の対象者はA療養病棟入院中の全患者であった。

2.2 声かけの方法

病棟スタッフの日々の業務の中にOT棟集団活動への参加の声かけをする誘導係（以下、OT誘導係）を設定することとした。病棟スタッフには看護師、介護士（看護助手）が含まれていた。OT誘導係はOT棟

集団活動の開始時刻になると患者一人一人に声かけをして回った。声かけだけで自発的に参加出来る患者には、OT棟集団活動が始まる時刻を知らせ、今まで参加したことのない患者には活動内容を説明し参加を勧めた。OT誘導係は患者の様子を見ながら、手を引き誘導し、歩行が難しい患者には車椅子を使用して引率した。OT棟集団活動に参加し病棟へ戻ったときには患者の頑張りを称賛する関わりを行った。OT誘導係による声かけだけでは参加しない患者に対しては、担当の看護師または介護士が日ごろ患者と接する中でOT棟集団活動への参加を促す関わりをもった。病棟スタッフによる声かけは2013年7月19日から開始した。

2.3 データ収集

データ収集の対象となる活動は、OT棟集団活動のうち参加メンバーが固定されていない手工芸とぬり絵の活動とし、それらに参加したA療養病棟入院患者の参加者数を毎回記録した。また、病棟日誌より入棟者数を収集し、それをもとに毎回のOT棟集団活動の参加率を算出した。データ収集の期間は2013年6月1日から10月30日の5か月間だった。

2.4 分析方法

対象の活動である手工芸とぬり絵に参加した割合（参加率）をもとに、声かけの取り組みを始める前の月（6月）とその翌月以降（7～10月）の参加率の有意差をそれぞれ検定した。Shapiro-Wilkを用いて正規性を検定した結果、参加率に正規性が認められたため、検定には一元配置分散分析とTukeyの方法を用いた。解析にはIBM SPSS Statistics Ver. 22を使用し、有意確率は5%未満とした。

2.5 倫理的配慮

研究の対象者は精神科病院療養病棟に入院している患者であるため、報告にあたっては個人が特定できないよう十分に配慮した。事例に対しては研究の目的を口頭および文書にて説明し、自署にて同意を得た。説明の際には研究の参加を断っても不利益にならないこと、同意した後でも研究の参加を撤回できることを付け加えた。

3 結果

3.1 参加状況

各月の参加率の平均値および標準偏差は、6月が23.0±5.2%、7月が25.3±7.7%、8月が28.4±7.5%、9月が33.3±6.4%、10月が31.4±5.2%であった（図1）。6月と各月の平均参加率を比較したところ、7月とは有意差が認められなかったが、8～10月とはす

すべての月との間に有意差が認められた。

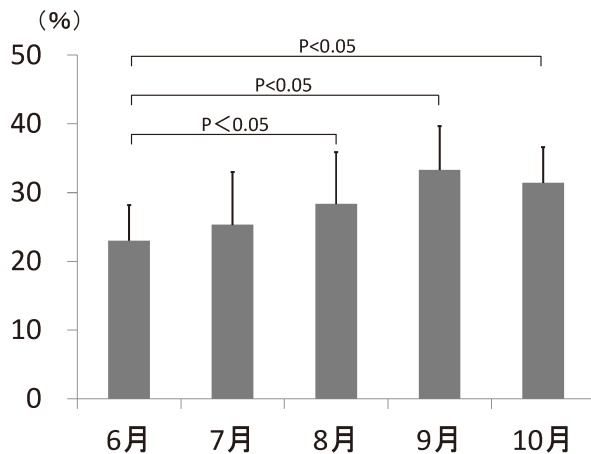


図1 各月のOT棟集団活への平均参加率

以下では、作業療法士の声かけでは十分な参加が得られなかったが、病棟スタッフの声かけによりOT棟集団活動に参加することが出来るようになった事例を紹介する。

3.2 事例1 (親身になって心配してくれる看護師の期待に応えようとして参加するようになった事例)

Bさん、80代男性、統合失調症。病棟では食事、整容など最低限の日常生活活動は自分でするもののほとんどの時間を臥床して過ごしていた。月1回実施している病棟集団活動でのカレンダー作りには参加していたが、手足の痺れや痛みを訴えその他の病棟集団活動には参加することはなかった。ましてOT棟集団活動に参加することはなかった。病棟スタッフの声かけが始まって「痺れて痛いから…行きません」と断るのみであった。担当看護師はBさんの痺れる手足をさすりながら「このまま寝てばかりだと体が動かなくなるからOTに参加したほうがいいですよ」「OTに行かないのなら、ベッドの上で体操だけは絶対して下さいね。寝たきりにならないように…」と数日にわたり話をした。病棟では毎週水曜日にシーツ交換を行っていたが、シーツ交換の為にBさんがベッドから出た際も「OTに行っておいで」と声をかけ続けた。声かけが始まって2ヵ月が経つ頃、Bさんは担当看護師と共にOT棟にやってきた。看護師は「いつも寝てばかりですが、今日は運動がてらOTに来ました」と作業療法士に説明し、Bさんに「頑張ってるね」と声をかけ送り出した。Bさんは初めてぬり絵の活動に参加し、約1時間取り組むことが出来た。Bさんが参加し始めて1ヵ月が経つ頃には毎週自主的に参加するようになった。「1週間に1回だけですが、参加を頑張ろうと思います。痺れがひどくなる前には帰りますがね…」と話すようになり継続して参加出来るようになった。

3.3 事例2 (安心して取り組める活動を病棟スタッフが提案出来たことがきっかけになった事例)

Cさん、70代女性、妄想性障害。入院4か月目の7月にA療養病棟に転入してきた。病棟集団活動には参加しており作業能力が高かったため、作業療法士はOT棟集団活動での手工芸に参加するよう勧めていた。しかし、Cさんはいつも「視力が悪いのでOTに行っても何もできない。眼が疲れるから何もしたくない」と断っていた。ある日のOT誘導係はCさんのカラオケ好きを知っており、「今日はカラオケをしているみたいです。OTに行ってみましょう」と誘い一緒にOT棟にやって来た。カラオケを見学しに来たCさんはカラオケを少し聴いた後、作業療法士に頼まれて他の患者が行っている作品作りを手伝うこととなった。Cさんは他の患者の作業の一部を手伝いながら、材料がなくなるとそれを作業療法士に伝えるなどして他の患者の世話をやいていた。他の患者に感謝をされた時には照れくさそうにしていた。CさんのOT棟集団活動を援助していた作業療法士は、そのときのCさんの様子を病棟スタッフに伝えた。その情報が病棟スタッフで共有され2回目からは「また〇〇さんを手伝ってあげてください」と声かけをするようになった。8月には手工芸、ぬり絵どちらの活動にも自主的に参加することが出来るようになった。

3.4 事例3 (強い口調での促しにより参加するようになった事例)

Dさん、50代男性、統合失調症。約30年前に発症し、当院には約20年間入院している。Dさんは日中臥床することはほとんどなく、病棟の中や周囲をうろろして過ごしていた。生活全般に声かけが必要であり、整容や入浴に関しては自らしようとするのではなく、一度言っただけではなかなか行動には移さなかった。入れ歯を外してデイルームのテーブルに置くことがあり、置かないよう注意してもほとんどきかなかった。欲求をコントロールすることができず、受け取った小遣いはすぐに全部使ってしまった。OT棟集団活動には、気分が乗った時だけ作業療法士の声かけに応じて参加していたが、それは月に2~3回程度であった。病棟スタッフの声かけが始まりDさんのOT棟集団活動への参加は増加した。病棟スタッフの声かけの方法は、作業療法士が行っていた優しい口調ではなく、「OTに行きなさい」と強い口調であった。Dさんは病棟スタッフの声かけで参加しても、集中が続かないため数分ぬり絵をすると病棟へ帰ろうとした。作業療法士は「せっかくOTに参加したのだから、もう少しOT棟にいきましょう」と説得したが、Dさんの病棟へ帰りたい気持ちは変わることはなかった。病棟に帰ったDさんは、病棟スタッフから「もう帰ってき

たん？まだ、OTの時間中でしょう。もう1回行ってきなさい」と言われた。Dさんは、すぐにOT棟に戻り終了時刻まで過ごすことが出来た。このようなやり取りを数回繰り返した結果、月に2～3回しか参加する事なかったDさんは、病棟スタッフの声かけにより、月に10回以上参加するようになった。ぬり絵をする時間も増え、作業療法士と会話を楽しむようになっていった。

4 考察

療養病棟において患者のOT棟集団活動への参加率を上げるため病棟スタッフによる声かけの取り組みを導入した。声かけを始める前の6月に比べて声かけを始めた7月以降は徐々にOT棟集団活動への参加率が増えていった。8月、9月、10月の平均参加率は6月に比べて有意に高かった。これまで作業療法士が声かけを行ってもそれほど大きな効果が得られなかった。しかし、今回病棟業務としてその日の誘導係が声かけを行うことに加えて担当看護師や担当介護士が声かけを行う取り組みを導入した結果、参加率が増えていった。その要因には、新たに病棟スタッフによる声かけが加わったという量的なものがあるだろうがそれ以外にどのようなものがあるのだろうか。

事例1では担当看護師は痺れて痛みを訴える手足をさすり、「このまま寝てばかりだと体が動かなくなるからOTに参加したほうがいいですよ」と心配する関わりを日ごろから持っていた。看護師は投薬など医学的な関わりだけでなく食事の準備、入浴の介助など日常のケアも行っており患者に1番近い存在である。日々の身の回りの世話に加え、手足をさすりながら心配してくれる担当看護師の存在はBさんにとってまるで家族のような存在になっていたのかもしれない。そのような存在の者からの期待に応えようとするBさんの思いがOT棟集団活動への参加の第一歩を導いたのではないだろうか。作業療法士である菊池²⁾らは、1日の大半を臥床して過ごす自閉傾向のある統合失調症患者に、半年間週に1度個別訪問し二者関係を構築することからはじめ自主的に離床することに成功し活動性が向上したことを報告している。同じく統合失調症で臥床傾向の強いCさんが声かけを始めて2か月が経つ頃からOT棟集団活動に参加するようになったのは、既に二者関係を構築している病棟スタッフが声かけを行ったことが一因ではないだろうか。

事例2では病棟の誘導係は、Cさんの目が悪くて細かい作業をしたがらないこと、カラオケが好きであることを知っていた。また、好きなカラオケであれば活動に参加する可能性があることを理解していた。つまり、病棟スタッフはCさんの身体状況、興味、志向性を知っていた。このような情報は日ごろからCさ

んのケアに携わっている病棟スタッフにとっては入手しやすいものではないだろうか。視力が低下しているCさんはカラオケだけでなく、作品作りに取り組んだ。その活動を提案したのは作業療法士だった。作業療法士はCさんの能力を見極め、Cさんができる作業を選択した。そのことによってCさんは楽しく活動に取り組むことができたと思われる。2回目から継続して参加することができたのは、前回と同じ作業ならできるという安心感があったからではないだろうか。このように心身に障害があり集団活動に参加することに不安を感じている患者に対しては、患者の能力を見極め安心して取り組めるよう援助することが大切である。また、病棟スタッフが「また〇〇さんを手伝ってあげてください」とCさんのやる気を生かさせるような声かけをすることができたのは、作業療法士がCさんのOT棟集団活動での様子を病棟スタッフに伝えたことが影響していたと考えられる。つまり、OT棟集団活動への参加率を高めるには作業療法士と病棟スタッフの連携が重要といえる。

事例3では、口調の弱い作業療法士の声かけではあまりOT棟集団活動に参加しなかったが、口調の強い病棟スタッフの声かけでは頻繁に参加するようになった。Dさんはしてはいけないことを注意されてもなかなかきかず、欲求をコントロールすることも難しかった。病棟内ではうろろうして過ごすことが多く、目的のある活動に参加することができていなかった。Dさんの日ごろの生活を間近で見ている病棟スタッフは、Dさんに目的のある活動に参加してほしいと思っていたに違いない。しかし、弱い口調ではDさんが容易には参加しないことを知っていた。むしろ、強い口調で声かけをする必要があることを理解していた。つまり、患者の生活の質が高まることが期待される場合、たとえ成人であろうとも規範に従えず身勝手なところがある患者に対しては、強い口調で行動を促すことには一理あると言える。

以上のことから、病棟スタッフの声かけによりOT棟集団活動への参加率が増加した。その背景には、心配してくれる身近な存在の者への期待に応えようとする患者の思い、病棟スタッフの愛のある厳しい言葉、作業療法士の患者の能力を見極め安心して活動に取り組むための援助、作業療法士と病棟スタッフとの連携が存在していると考えられる。

5 結論

当院A療養病棟は急性期を過ぎ症状も落ち着いた患者が多く、社会復帰を目指し活動性をあげることが目標とする患者が多くいる。日中臥床した生活を送っている患者に活動意欲がもてるよう援助することが重要である。今回行った病棟スタッフの声かけは、患者

の活動範囲を拡大した。臥床しがちで不活発な生活を送っている患者の活動意欲を引き出すには関係性を作ることが重要であり、その意味において生活の場を見

守り援助している看護師をはじめとする病棟スタッフの協力は欠かせない。

文 献

- 1) 奥村太志, 渋谷菜穂子: 統合失調症の「長期入院に関する」認識—統合失調症患者の語りを通して長期入院への姿勢の構成要素を明確にする. 日本看護医療学会誌, 7: 34-43, 2005
- 2) 菊池琴美, 佐々木良範ほか: 自閉傾向のある統合失調症患者への関わり. 青森県作業療法研究, 20: 39-41, 2012

Effects of asking patients to participate in occupational therapy by ward staff

— A trial in a long-term care ward in a psychiatric hospital —

Miwa NAKASHIMA^{*1} Taisaku SUENAGA^{*1} Kenji YASUDA^{*1}
Kaoru SHIGETA^{*1} Miyuko MORIOKA^{*1} Seiji NISHIDA^{*2}

*1 Daijikai Mihara Hospital

*2 Department of Occupational Therapy, Faculty of Health and Welfare,
Prefectural University of Hiroshima

Abstract

We implemented a trial at a long-term care ward of a psychiatric hospital where the ward staff asked the patients to participate in group activities at an occupational therapy ward. We set a person in charge of asking patients to participate as a staff member's daily work every weekday. The trial was offered by the ward staff in charge of each day. In addition, each nursing and care staff member offered the activity to their own patients if they had difficulty participating in group activities. As a result, the number of patients who participated in group activities at the occupational therapy ward significantly increased. Through some cases, we considered that there were some background factors: 1) patients' attitude that they try to live up to the expectations of their own staff who worry about them, 2) ward staff's strict words with love, 3) assessment and support of occupational therapists in order that patients engage in activities at their ease, 4) cooperation with occupational therapists and ward staff.

Key Words : group activities, participation, ward staff, asking, long-term care ward